

記念館新聞



福崎町立
柳田國男・松岡家記念館
〒679-2204
神崎郡福崎町西田原
1038の12
電話：0790-22-1000

今年松岡静雄

生誕135年!

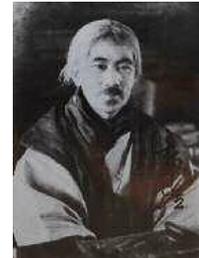
松岡家の七男である静雄は明治11年(1878)に誕生し、昭和11年(1936)5月23日に生涯を閉じます。今年松岡静雄の生誕135年にあたります。

松岡静雄は海軍兵学校を首席で卒業し、海軍大佐まで昇進します。けれども、41歳のときに病を患い退役をします。

軍人として外国や島々に赴く中で、静雄はその土地の民族や言語に関心をもちます。

そして、48歳のときに鶴沼(くげぬま 現・神奈川県藤沢市鶴沼)に隠遁(いんとん)すると、研究を本格化させます。

静雄の研究内容は、民族学、言語学、国学など対象は幅広いものでした。二つに大別すると、一つは南洋の民族および言語に関するもの、もう



一つは日本の古語および古典に関するもの

南洋の民族および言語に関する研究については、大正期から昭和期にかけて資料が皆無といえる状況の中で、先駆的な試みを果たしたといえると思えます。

そして、日本の古典および言語に関する研究では、52歳のときに「語誌篇」「訓話篇」からなる『日本古語大辞典』を完成させています。

このように静雄は、日本だけでなく世界にも目を向け、59歳で亡くなるまで研究を行いました。多くの著作を残しました。

名作著書紹介

故郷七十年を讀む

柳田國男は『故郷七十年』で「次弟松岡静雄」と題して次のように記しています。

「私ら兄弟、長兄と次兄の二人はそう露骨にあらわしはしなかったが、私以下の三人は皆凝り性と、人のやらないことをやってみようとする野心と、負けん気というような性癖をもっていた。末弟の輝夫は比較的

おだやかな性質であったが、それでもやはり自分の好きな方へ偏り勝などころがあった。それが静雄になるともっと極端で、この癖がだんだんひどくなり、終いには海軍そのものに居づらくなってしまう。いろいろのことに理解はもっていない、何か人のやらないことをやってみようとする。これは海軍あたりの均一を好む団体社会では無理な話である」



柳田國男・松岡家記念館

☆☆入館案内☆☆

☆☆開館時間
9時～16時30分
(入館は16時まで)
☆☆休館日
月曜、祝日の翌日
12月28日～1月4日
☆☆入館料
無料



『日本古語大辞典』

また、静雄が海軍で『日露海戦史』の編纂を命じられると、その性格を発揮したとあります。当時法制局にいた國男のもとを訪ねて質問をした、「終いには海軍きつての言語、国語学者になつてしまった」と述べています。

しかし、静雄は一般の国語学者と交際することがありませんでした。向こうから話に来る人は別として、静雄から聞きに行くということは決してなかったのです。

そのため、國男は静雄が国語学者と交際をしていけば、世論にのって新しい方向に行けるのだが、思いやつています。

さらに静雄には「彼自身の言語観、国語観」があり、いくつかの本を出版したが、「何れも専門の学者たちからは、甚だ尊敬せられない本ばかりであった」と評しています。

國男は静雄の能力の高さを認めながらも、研究を同じくする人々との交流を深め、より研究を高めていくことを望んでいたことがわかります。



補修後の「矢表」

本展では、保存修理工事中の三木家住宅の仮囲いにラッピングされている「矢表」の画稿4点を展示しています。このうちの1点は『記念館新聞』第54号で写真を掲載したもので、平成24年度の映丘画稿の補修事業で額装にしました。

画稿4点を並べて展示することで、「矢表」という一つの作品を生み出すのに、映丘がどのようにして行錯誤をしたのかをご覧いただくことができます。

ぜひ、足をお運びください。



館日記

5月31日まで当館では、企画展「松岡映丘画稿展」が描く武者絵を「開催しています」。